【資料編】

津田梅子

日本の女子教育の発展に力を尽くした教育者

女子英学塾開校当時の津田梅子の肖像（1901年頃）

「津田塾大学津田梅子資料室 所蔵」

注1） 日本で，太陽暦（いわゆる新暦）が正式に使用されるようになったのは，明治6年1月1日からです。それ以前は，太陰太陽暦（いわゆる旧暦）が使用されていました。この副読本では，混乱を避けるために，新暦に統一して表記することとします。登場人物の年齢は，満年齢で表記します。

注2） 津田梅子の幼名は，“むめ”といいます。梅子が生まれたとき，母の初子が枕もとで咲いていた梅にちなんで名付けました。後に漢字の“梅子”と改名しました。この副読本では，梅子に統一して表記することとします。

注3） 岩倉海外使節団は，木戸孝允や伊藤博文のほか，津田梅子たちを含む留学生など約100人に及んでいました。

1　梅子の誕生

1864年（元治元年）12月31日，江戸牛込南御徒町（今の東京都新宿区）に，佐倉藩士の父・津田仙と母・初の次女として，津田梅子が誕生しました。梅子が生まれたのは江戸時代の最後の頃でした。武士が社会の中心でしたので，女性が社会に出て活躍することはとても難しく，父の仙は跡継ぎになる男の子が生まれるのを期待していました。生まれたのが女の子だと知ると，ひどくがっかりしたそうです。

娘・梅子（生後四カ月）を抱く津田仙
「津田塾大学津田梅子資料室 所蔵」

それでも，父の仙は先進的な考えをもっていて，自ら英語を学び，海外視察に加わって欧米諸国の文化を自分の目で見て，日本に積極的に取り入れようとするような人物でした。そして，欧米諸国では女性も自由に学び，社会に出て活躍していることを知っていました。そこで，当時仙が働いていた北海道開拓使の次官である黒田清隆がアメリカへの女子留学生を募集しようとしていることを知ると，梅子が加われるよう，力を尽くしたのです。こうして，梅子は日本で初めての女子留学生に，最年少で選ばれました。

皇后謁見のために参内した日本初の女子留学生たち
（左より上田貞子・永井繁子・山川捨松・津田梅子・吉益亮子）
「津田塾大学津田梅子資料室 所蔵」

※謁見とは…貴人や目上の人に会うこと
※参内とは…宮中（特に皇居の中）に行くこと

日本を発つとき，梅子が着ていた着物（小袖）は，大人用の小袖を梅子のために仕立て直したものだそうです。幼くして旅立つ梅子のために，父と母は精一杯の準備をしてくれたのです。また，荷物を詰めたトランクには，梅子が大好きな人形もひそかに入れられていたそうです。梅子は，その人形を見て日本を恋しく思う気持ちをなぐさめたのでした。

米國留學免許候事
文部省
津田梅

1871年（明治4年）文部省より津田梅子に与えられた留学免許状
「津田塾大学津田梅子資料室 所蔵」

いよいよ，アメリカに向けて出発するというとき，梅子の小さな胸は，大きな不安で押しつぶされそうになっていました。わずか6歳でたった一人，見知らぬ国へ旅立つのですから当然です。しかし，梅子の中には，もう一つの気持ちがわきあがっていました。これから見る新しいものへの期待や，思う存分勉強ができる喜びです。こうして，1871年（明治4年）12月23日に，横浜の港から梅子たちを乗せた船が出航し，長い留学生活が始まりました。

2　アメリカでの留学生活

五人の留学生たち シカゴにて初めての洋装
（左より永井繁子・上田貞子・吉松亮子・津田梅子・山川捨松）
「津田塾大学津田梅子資料室 所蔵」

梅子と一緒にアメリカに向かった女性は，上田貞子（16歳），吉松亮子（14歳），山川捨松（11歳），永井繁子（9歳）です。長旅を経て，サンフランシスコに到着した着物姿の5人の少女たちは，ものめずらしさから人々から大変な注目を集めました。見世物のような気持ちになった梅子たちは，強くお願いして首都ワシントンに着く前に洋服を買ってもらい，着替えました。

梅子は，日本弁務使館（今の日本大使館にあたる役所）の書記官であった，チャールズ・ランマンにあずけられました。子どもがいなかったランマン夫妻は，梅子をわが子のように大切に育ててくれました。梅子は，ランマン夫妻の深い愛情を受け，スティーブンソン・セミナリーという学校（現在の小学校に相当する学校）に通い英語をはじめ芸術や文化にもふれ，熱心に勉強に取り組みました。望めば自由に

勉強ができる学校は，梅子にとってとても幸せな場所でした。そして，学べば学ぶほど，梅子の心の中には「もっと勉強したい。」という気持ちがわき上がってきました。ランマン夫妻も，梅子がのびのびと育つよう心をくだいてくれました。卒業後にワシントンにある私立の女学校アーチャー・インスティチュート（現在の中学校・高等学校レベルの学校）に進学した梅子は，さらに勉強に打ち込むとともに，ランマン夫妻と各地を旅行して，優れた産業や豊かな文化・芸術，雄大な自然などに触れました。

ワシントンにて7歳頃の梅子
「津田塾大学津田梅子資料室所蔵」

体調を崩して年上の二人は早々に帰国してしまいましたが，梅子は，山川捨松，永井繁子と励まし合って頑張り続けました。捨松と繁子と梅子は，日本に帰国してからも，友達として，よき理解者として，生涯にわたり交流を続けました。そして，捨松と繁子は，梅子の夢の実現のために何度も力を尽くしてくれました。また，留学中に，捨松がお世話になった家のアリス・ベーコンと知り合ったことは，のちの梅子にとって大きな意味を持つことになりました。

こうして，17歳になった梅子は，1882年（明治15年）11月20日，日本に帰国しました。

3　女性をとりまく当時の日本の社会

アメリカでの留学生活で，梅子には大きな目標ができていました。それは，「教師になって，日本の女性にも学ぶことの楽しさを伝えたい。」ということでした。しかし，梅子が日本を出発した翌年の1872年（明治5年）に，明治政府によって男女平等の義務教育を行うという学制が発布されていたにも関わらず，梅子が帰国した当時，小学校に通う女子の割合は，男子の半分にもなっておらず，学ぶ楽しさを伝えるにはほど遠い状況でした。

日本に帰国した梅子は，海岸女学校（現在の青山女学院の前身）の英語教師として留学の成果を生かそうとしました。しかし，与えられた労働条件は納得できるようなものではなく，梅子は，短期間で仕事を終える契約を結ぶ決断をしました。アメリカで自由に学ぶ楽しさを存分に味わってきた梅子は，日本の女性が学校に通うこと，ましてや，社会に出て働くことはとても難しいと痛感しました。それでも，岩倉使節団でともにアメリカに渡り励ましてくれた伊藤博文の誘いで，伊藤家の家庭教師を勤め，さらには，華族女学校（現在の学習院女子高等科・中等科）で教授として働きながら，女性に学ぶ楽しさを伝える努力を続けました。しかし，当時の日本の社会では，女性は家にいて子育てや家の仕事をするべきだという考えがとても強く，梅子の志（こころざし）はなかなか実現しませんでした。

苦しむ梅子は，アメリカでお世話になったランマン夫妻に，日本ではまだ女性が社会に出て活躍するのは難しいこと，そのためには質のよい教育が必要なので，日本に女性のための学校を作りたいことなどを，手紙で何度も相談しました。手紙を書きながら，自分には何ができるか何をすべきか考え続けた梅子は，日本の女性に学ぶことの楽しさを知ってもらうためには，自分自身がもっともっと学ぶべきだと考えました。そして，梅子を理解し支えてくれた多くの人々の後押しを得て，二度目の留学が実現し，1889年（明治22年）7月，アメリカに旅立ちました。そのとき，梅子は24歳でした。

4　学びと出会い

1889年（明治22年）ブリンマー大学入学当時の梅子
「津田塾大学津田梅子資料室 所蔵」

アメリカに渡った梅子は，ブリンマー大学に入学し，生物学を修めました。さらに，師範学校で教授法についても学びました。

そして，生涯にわたる友達となるアナ・ハーツホンという女性と出会いました。実は，梅子の父である仙と，アナの父であるヘンリー・ハーツホンは，深い交流があったのです。アナとの出会いも，梅子にとっては大変な幸運なことでした。

梅子の研究は大変優れており，研究者としての道を進められたほどです。しかし，梅子の日本の女性に高等教育を受けさせたいという思いはとても強く，恩師の強い引き留めを断って，梅子は1892年（明治25年）8月，日本に帰国しました。フランスのマリー・キュリーが，女性初のノーベル賞を受賞したのは1903年，梅子の帰国から約10年後のことです。

5　女性のための学校の設立

帰国後の梅子は，華族女学校の他，女子高等師範学校（現在のお茶の水女子大学）の教授になり，女性が高等教育を受けられる学校の設立に全力を注ぎました。その間，アメリカのデンバーで開催された万国婦人連合大会に日本代表として出席して，女性教育を世界に広げることの大切さを演説しました。さらに，ヘレン・ケラーと面会することができました。目が見えず耳が聴こえず言葉を話せないという障害を，家庭教師のアン・サリバンとともに乗り越えたヘレン・ケラーの話に，梅子は教育がどんなに大きな意味を持つかを強く感じました。そ

の後さらにイギリスに渡り，女子教育の事情やヨーロッパの文化・歴史を学び，大学の講義も受けました。

イギリスでは，フローレンス・ナイチンゲールとも面会することができました。ナイチンゲールは，「近代看護の母」と呼ばれる人ですが，教育者としても大変優れた人でした。梅子は，そのときナイチンゲールからもらった花束を押し花にして，生涯大切に持っていました。ヘレン・ケラーやナイチンゲールとの出会いによって，梅子は女子教育の大切さをさらに実感しました。

梅子に，もう迷いはありませんでした。帰国した1899年（明治32年），高等女学校令，私立学校令が公布されたことにより，私立の高等女学校が認められることになりました。梅子の目指す女子教育がいよいよ実現することになったのです。

梅子が学校をつくる決意を固めたとき，それまでに出会った数多くの女性たちが支えてくれました。みんなが梅子の行動力に，自分たちの夢を託したのです。その中心は，初めての留学をともにした捨松と繋子でした。

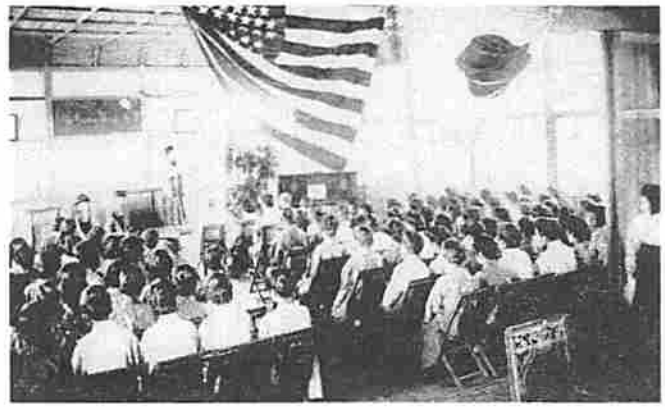
苦労を重ねて1900年（明治33年）9月，麹町一番町（今の東京都千代田区三番町）に，『女子英学塾』が誕生しました。このとき，梅子は35歳，生徒は10名でした。教師として助けてくれたのは，アリス・ベーコンや梅子の教え子たち，顧問は捨松が引き受けてくれました。これが，のちの津田塾大学への第一歩となりました。

ちなみに，女子英学塾の開校式で，梅子は“all-round women”という言葉を使いました。「完璧な女性をめざす，男性に負けない女性になる」という意味ではなく，「女性が男性と対等な自立した人間になり，広く世界で活躍する人間に成長してほしい」という願いを込めたのです。

学ぶことの楽しさを知った女性たちは，熱心に勉強に打ち込みました。アリス・ベーコンと入れ替わるように，アナ・ハーツホンが教師になり，梅子たちは全力を傾けて授業を行いました。そして，第一回の卒業生8人のうち5人は，文部省の英語科教員検定試験に見事合格し，国が認める初めての女性英語教師になったのです。

女子英学塾・最初の校舎にて（一番町）
1901［明治34］年3月29日撮影
「津田塾大学津田梅子資料室 所蔵」

その後，高等専門教育を行う学校に認められ，校舎も麹町五番町（現在の東京都千代田区一番町）に移りました。梅子のつくった『女子英学塾』は，教育機関として国に認められ，高等師範学校や東京外国語学校（現在の東京外国語大学）からも学生たちが授業を見学にくるほどでした。その後，卒業生には英語科教員検定試験の免除が認定されました。わずか10人で始まった生徒の数も，150人に達しました。



女子英学塾・五番町校地時代（震災前）のキャンパス風景
「津田塾大学津田梅子資料室 所蔵」

6　女性の自立と社会貢献を願って

人生の全てを日本の女子教育の発展に注いだ梅子は，40歳を過ぎた頃から病気のため入院をくり返すようになりました。校舎も，1923年（大正12年）9月1日に発生した関東大震災によって，すべて焼けてしまいました。それでも，アメリカや日本の梅子を支える多くの人々からの援助を得て，新校舎が建築されることになりました。多くの人々が梅子を支援したのは，日本の女性に高等教育を受けさせてあげたいという，梅子の強い思いに賛同したからです。

晩年の津田梅子
1927年（昭和２年）撮影
「津田塾大学津田梅子資料室 所蔵」

女子教育のさらなる発展のために仕事を続けたいと願った梅子でしたが，度重なる病気のため，どうしても仕事を続けることができなくなりました。生涯の夢を，次代を担う人たちに託した梅子は，1929年（昭和4年）8月16日，静養中の鎌倉の別荘で，息を引き取りました。満64歳の生涯でした。梅子が日記に残した最後の言葉は，“Storm last night.”でした。「昨夜は嵐」という言葉は，梅子の人生を象徴しているかのようです。

梅子がつくり上げた女子英学塾は，1932年（昭和7年），小平に新校地が完成しました。梅子の死後3年後のことで，今も残る本館は，ハーツホン・ホールと名づけられました。

翌1933年（昭和8年）には，梅子の業績をたたえて『津田英学塾』と学校の名称が変えられ，『津田塾専門学校』を経て，1948年（昭和23年）に『津田塾大学』となりました。今も同じ小平の地で学生たちが学ぶ津田塾大学は，2020年に女子英学塾の設立から数えて創立120周年を迎えました。現代もなお，梅子の精神は脈々と受け継がれ，時代を支えるとともに新たな道を切り拓く女性を育成していて，津田塾大学で学んだ女性たちは，卒業後に幅広い方面で活躍しています。

女子英学塾小平校舎（現在の津田塾大学小平キャンパス）
「津田塾大学津田梅子資料室 所蔵」

梅子は，当初，父の津田仙も眠る青山墓地に埋葬されましたが，生前の願いを受けて小平キャンパスの一角にお墓が移されました。梅子は，今も静かに，キャンパスで学ぶ学生たちを見守っています。

7　むすびに

生涯を通じて，女性の地位向上と女子高等教育に力を尽くした業績が認められ，2024年に発行される新しい紙幣の五千円札に，梅子の肖像画が採用されました。新しい五千円札を手にしたとき，梅子の生き方や業績を通して，日本の歴史について改めて考えてみましょう。

8　梅子の年表

西暦	年号	年齢	梅子のあゆみなど	日本や世界のできごと
1864	元治元	0	12月31日，江戸牛込南御徒町（現在の東京都新宿区）に生まれる。	
1867	慶応3	2	父津田仙がアメリカに渡る。	大政奉還 王政復古の大号令
1868	明治元	3		明治改元 江戸を東京と改称
1871	明治4	6	12月，最年少の梅子を含めた開拓使派遣の5人の少女が，岩倉使節団に伴われて横浜を出発する。	廃藩置県 文部省設立
1872	明治5	7	1月，アメリカのサンフランシスコに到着。 11月，梅子，ランマン夫妻に預けられスティーブンソン・セミナリー（小学校）に入学する。	学制発布 文部省令により初の女学校創立
1873	明治6	8	キリスト教の洗礼を受ける。	キリスト教禁止令廃止，岩倉使節団帰国
1876	明治9	11	梅子，捨松，繁子がランマン夫妻とともに，アメリカ独立100周年記念のフィラデルフィア万国博覧会に行く。	帯刀禁止令
1877	明治10	12		西南戦争 華族女学校開校
1878	明治11	13	梅子，スティーブン・セミナリーを卒業。ワシントンのアーチャー・インスティテュートに入学。捨松，繁子はヴァッサー大学に入学。	
1879	明治12	14		学制廃止 教育令制定
1881	明治14	16	開拓使より帰国の命令。梅子，捨松は一年の滞在延長を申請。ヴァッサー大学を卒業した繁子は帰国。	
1882	明治15	17	6月，梅子，アーチャー・インスティテュートを卒業。 10月，ヴァッサー大学を卒業した捨松と帰国。	開拓使廃止
1883	明治16	18	梅子，夏季の短期間だけ海岸女学校で教壇に立つ。	鹿鳴館開館

			12月，伊藤博文に招かれ伊藤家の家庭教師兼通訳として働く。	
1884	明治17	19	梅子，桃夭女塾で教え始める。	
1885	明治18	20	9月，華族女学校で教え始める。	伊藤博文初代内閣総理大臣就任
1886	明治19	21		帝国大学令公布 その後小学校令，中学校令，師範学校令公布
1888	明治21	23	6月，アリス・ベーコンが来日し，梅子とともに華族女学校で教員として働く。	
1889	明治22	24	梅子，再びアメリカに渡り，9月，ブリンマー大学で，選科で生物学を専攻する。アナ・ハーツホンと出会う。	大日本帝国憲法発布
1890	明治23	25		教育勅語発布 第1回帝国議会招集
1891	明治24	26	1月，オスウィーゴ師範学校で教授法を学ぶ。 ブリンマー大学で，モーガン博士とカエルの卵の共同研究を行う。	
1892	明治25	27	6月，ブリンマー大学選科を修了し，8月，帰国する。 9月，華族女学校の教員に戻る。	
1894	明治27	29	モーガン博士との共同研究が科学誌に発表される。	日清戦争
1898	明治31	33	5月，女子高等師範学校の教授となる。 6月，万国婦人連合大会の日本代表としてアメリカに渡り，講演する。 8月，ヘレン・ケラーに面会する。その後，イギリス視察に向かう。	
1899	明治32	34	3月，フローレンス・ナイチンゲールに面会する。7月にアメリカに渡り，その後，帰国する。	高等女学校令公布 私立学校令公布
1900	明治33	35	4月，アリス・ベーコンが来日する。 7月，私立学校令により，女子英学塾の設立が認可される。アリス・ベーコンが女子英学塾の教師として運営の手助けをする。	

			9月，東京市麹町一番町（現在の東京都千代田区三番町）の校舎に10名の生徒を迎えて開校する。	
1902	明治35	37	4月，アリス・ベーコンが帰国し，入れ替わりに5月，アナ・ハーツホンが来日し，塾で教え始める。	日英同盟締結
1903	明治36	38	2月五番町の新校舎に移転する。4月，第一回卒業式が行われる。	専門学校令公布
1904	明治37	39	3月，専門学校として認可される。	日露戦争
1905	明治38	40	9月，英語科教員無試験検定扱いを許可される。 9月，アリス・ベーコンが再び来日する。	
1906	明治39	41	秋ごろより，梅子体調を崩すことが多くなった。	
1907	明治40	42	1月から，病気の療養と視察を兼ねてアメリカに渡る。その後イタリアを経由して12月に帰国の途につく。 （1908年1月横浜に到着）	
1908	明治41	43	4月，梅子の父，仙が亡くなる。	
1909	明治42	44	8月，梅子の母，初子が亡くなる。	
1914	大正3	49	2月，ランマン夫人が亡くなる。	日本第一次世界大戦に参戦
1917	大正6	52	5月，梅子は糖尿病を発症し，二度入院する。	
1918	大正7	53	5月，アリス・ベーコンが亡くなる。	大学令により公立・私立の大学を認可
1919	大正8	54	1月，梅子は女子英学塾の塾長を辞めることを申し出る。 2月，大山捨松が亡くなる。梅子も病気で倒れ，その後入退院をくり返す。	
1920	大正9	55		国際連盟発足
1923	大正12	58	9月，関東大震災により五番町校舎を失う。アナ・ハーツホンが塾の復興をめざす募金活動のためアメリカに渡る。	関東大震災
1926	大正15	61	アナ・ハーツホンが募金活動を終え，日本へ戻る。	昭和に改元
1928	昭和3	63	11月，瓜生繁子が亡くなる。	初の衆議院普通選挙
1929	昭和4	64	8月16日，梅子静かに息を引き取る。	世界大恐慌

【協力】

・津田塾大学 津田梅子資料室

【参考文献】

・髙橋裕子著「津田梅子－女子教育を拓く」岩波ジュニア新書 2022
・橘木俊詔著「津田梅子 明治の高学歴女子の生き方」平凡社 2022
・高橋うらら著「津田梅子 女子教育のとびらを開く」講談社 2022
・髙橋裕子監修「まんが人物史 津田梅子 女子高等教育にささげた生涯」KADOKAWA 2022
・津田塾大学津田梅子資料室監修「学習まんが世界の伝記 NEXT 津田梅子」集英社 2021
・大庭みな子著「津田梅子」朝日文庫 2019
・河合敦・山口正監修「週刊新マンガ日本史 45 津田梅子」朝日新聞出版 2011
・津田塾大学津田梅子資料室監修「学習まんが人物館 津田梅子」小学館 1997
・古木宜志子著「津田梅子」清水書院 1992
・吉川利一著「津田梅子」中公文庫 1990
・山崎孝子著「津田梅子」吉川弘文館 1962